

キリスト教主義大学に在籍する学生の キリスト教保育に対する意識調査

前田美和子*, 田中 沙織**

(2016年1月15日 受理)

Awareness Survey on Christian Early Childhood Education and Care, Targeting Students Who are Studying in Christian Universities

Miwako MAEDA*, Saori TANAKA**

The purpose of education was to “develop human resources that can foster children’s personality from early childhood to middle childhood with human education based on Christianity principles”. However, there has not been enough review regarding how students learn the “Christian Early Childhood Education and Care”, and what knowledge they have gained until their graduation, in the “education based on Christian principles”. In this study, we conducted an interview to investigate how deep the students at the universities for childcare workers understood the education on Christianity principles and how well they practiced that; furthermore, as one of a person who practice “developing human resources that can foster children’s personality from early childhood to middle childhood”, how the students understood the Christian early childhood education and care in order to contribute to society. Based on that, we clarified the current situation and demonstrated future challenges and prospects.

Keywords: Christian Universities キリスト教大学, Christian Early Childhood Education and Care
キリスト教保育, Schools for Childcare Workers 保育者養成校

1. はじめに

『新キリスト教保育指針』¹⁾によれば、キリスト教保育とは「子ども一人ひとりが神によっていのちを与えられたものとして、イエス・キリストを通して示される神の愛と恵みのもとで育てられ、今の時を喜びと感謝をもって生き、そのことによって生涯にわたる生き方の基礎を培い、共に生きる社会と世界をつくる自律的な人間として育つために、保育者が、イエス・キリストとの交わりに支えられて共に行う意図的、継続的、反省的な働き」である。キリスト教保育の歴史は古く、日本においては明治以降に歩みを見ることができる。そのキリスト教保育の主な役割を担ってきたのはクリスチャンであった。しかしながら、現代ではキリスト教保育に共感するノンクリスチャンの保育者も多い。深谷²⁾によると、キリスト教保育の現場ではノンクリスチャンの保育者は4人中3人になり、キリスト教保育を目指すクリスチャンは年々減少傾向にあることを言及している。

本学科は、「キリスト教主義にもとづく人間教育の理念を基礎」をその教育の根底に掲げ、来年で創設10周年を迎える、キリスト教保育をうたった保育者養成校である。しかしその歴史は古く、そ

* 広島女学院大学人間生活学部幼児教育心理学科専任講師

** 広島女学院大学人間生活学部幼児教育心理学科准教授

の起源は1895年にさかのぼる。もともと本学はキリスト教主義の女子教育を掲げ、1886年広島女学会として創立した。3年後の1889年に現在校母と呼ばれている N.B. ゲーンズが校長に就任し、1892年に幼稚園を開設、3年後の1895年に保姆養成科を発足させた。保姆養成科では1901年来日のマコーレー、1904年来日のクックら、アメリカ合衆国で幼稚園教員養成を受けて来日した教員によって最新の指導が行われた。ところが1921年、保姆師範科^{注1)}は米国南メソジスト教会の意向を受けて大阪のランバス女学院に移転し、広島における保育者養成校としての働きは一度幕が閉じられた。そして2006年4月、広島女学院創立120周年を機に、幼児教育心理学科として再びその幕が開かれ、保育者養成校としてスタートをきったのである。

本学科の人材養成と教育や研究の目的は、「キリスト教主義にもとづく人間教育の理念を基礎としながら、幼児期・児童期における子どもの人格形成を真に支援していくことのできる人材を育成」³⁾することであり、この事柄は大学案内やホームページなどにも記載され、広く公にされている。このように、キリスト教主義にもとづく人間教育を行う中で、キリスト教保育が神を通して子ども一人ひとりに向ける受容のまなざし、祈りをもって保育が行われることについても折に触れて教育を行っている。前述のとおり、クリスチャンではなくともキリスト教保育に共感を覚える優れた保育士が育成されるのであれば、「キリスト教主義に基づく教育」の中で、学生が「キリスト教保育」をいかに学び、何を得て卒業していくのかということについて省みる必要があろう。

学科創設10年を迎えようとしている今、本論では本学科の学生たちに、キリスト教主義教育及びキリスト教保育の精神がどのように受け入れられ、「幼児期・児童期における子どもの人格形成を真に支援していくことのできる人材」としてキリスト教保育を生かそうとしているのかについて、質問紙調査から学生の意識を明らかにし、今後の教育の課題と展望に向けた一考察としたい。

2. 研究方法

広島女学院大学人間生活学部幼児教育心理学科に在籍する4年生85名に対して、本学在学生のキリスト教及びキリスト教保育に対する意識調査を行った。アンケートによる質問事項は、「出身校について（公私の別、信教別）」、「卒業後の進路について（取得見込免許、4月以降の就職先）」、「本学でのキリスト教主義教育の学びについて（入学前キリスト教主義学校認知度、在学中のキリスト教精神に触れた機会、キリスト教を学ぶ頻度）」、「本学のキリスト教主義保育の学びについて（入学前の期待、在学中のキリスト教保育を学ぶ機会、キリスト教保育を学ぶ頻度）」、「就職の希望（キリスト教主義の園への就職希望、希望する条件）」、「キリスト教保育について（キリスト教保育と保育者の資質、キリスト教保育と他の園との違い）」、「その他（宗教に対する関心、キリスト教主義の園に対する就職意識、自由記述）」等である。調査期間は2015年12月15日から21日までの1週間である。その期間中69名の回答を得ることができ、回収率は81%であった。本研究は個人の信条に関わる調査を行うことから無記名とし、回答を行いたくない場合は記入しなくてよいことを質問紙に明記した。また、個人名が特定されないことがないよう、回収・分析にも配慮を行っている。

3. 調査結果・考察

(1) 研究対象者について

回答を得た本学科4年生の出身校は71.0%が公立高校出身、26.1%が私立高校出身である。私立

高校のうち、宗教とは関係のない高校出身者が79.7%、キリスト教系が8.7%、仏教系1.4%、「わからない」および「欠損」が8.7%であった。また、自身の信仰については「信仰を持っている」が2.9%、「信仰は持っていない」が92.7%であったが、うち15.9%は「信仰は持っていないが宗教に関心がある」と回答し、宗教に対して肯定的に捉えている学生は18.8%であった。

2014年6月に内閣府が発表した「平成25年度 我が国と諸外国の若者^{注2)}の意識に関する調査」⁴⁾によると、「日本の若者に、宗教が日々の暮らしのなかで心の支えや態度・行動のよりどころになると思うか」という問いに「そう思う」と回答した若者は、「そう思う」3.5%、「どちらかといえばそう思う」14.9%、若者の約18.4%が宗教を肯定的にとらえていることがわかる。設問事項と年齢層に違いがあるものの、宗教を肯定的に捉えているという点において、本学で4年間キリスト教主義教育を受けてきた学生たちのもつ宗教に対する意識は概ね全国的に平均的であると言える。

(2) 本学における学びについて

本学は1886年にアメリカ帰りの砂本貞吉牧師により、W.R. ランバース宣教師らの援助で創立された学校である。大学としては広島県内の女子大学として最も古い歴史を持っており、県内唯一のプロテスタント主義大学である。アンケート調査の結果、学生の87.0%が、入学前から本学がキリスト教主義大学であることを知っていたことから、本学がキリスト教主義大学であるという社会的認知度が高いことがわかる。ところが、本学入学時のキリスト教保育に関する学びについての期待度は図1のとおり「期待していた」が7.2%と低い。本学科がキリスト教保育について学べる学科であるという入学時の認知度は、今回の調査では不明である。しかしながら、入学時にキリスト教保育に関する学びをほとんど経験していない高校生にとって、本学のキリスト教保育に関する学びが保育者・教育者になるための資質向上の機会として、期待をもって入学してもらえるような教育成果の情報発信を行っていく必要があるであろう。

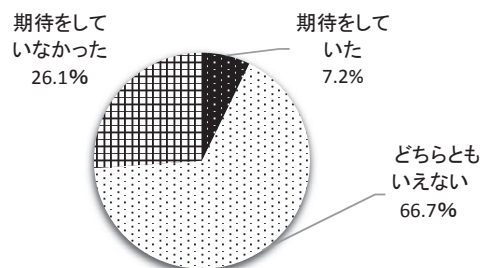


図1 本学のキリスト教保育に関する学びへの期待（入学時）

次に、4年間の学びを経て感じる「学びの満足度」について尋ねたところ、本学における「キリスト教に関する学びの満足度」は50.7%の学生が「十分である」と答え、「十分と感じない」と回答したのは5.8%であった。また「キリスト教保育に関する学びの満足度」は、50.7%が「十分である」と答え、2.9%が「十分と感じない」と回答した。この結果からは、キリスト教主義教育やキリスト教保育に期待せずに入學したが、卒業時には約半数が「十分である」と捉えていることがわかる。この結果について、「十分である」という言葉に内包される意図を探る目的で「卒業後の進路・就職状況」という視点からさらに分析を重ねた。「キリスト教に関する学びの満足度」「キリスト教

保育に関する学びの満足度」の学生の内、「卒業後の進路・就職状況」が「幼稚園・保育所・認定こども園」である「幼児教育系（n=48）」と「小学校・施設（保育所以外）・一般企業・就職準備」である「幼児教育系以外（n=27）」とに群分けした結果を図2に示す。その結果、「キリスト教に関する学びの満足度」「キリスト教保育に関する学びの満足度」の2項目ともに、就職先が「幼児教育系以外」の学生の中に学ぶ機会が「十分と感じない」学生がいないことや、「幼児教育系」に就職する学生の方が学びが「十分である」と答えた割合が低いことから、就職先が「幼児教育系」の学生は「幼児教育系以外」の学生と比較すると、学びが「十分でない」「どちらともいえない」と答える傾向が示された。今回の調査では対象人数が少なかったこともあり、統計的に有意な差はみられなかったが、「幼児教育系」に就職する学生の中にはキリスト教・キリスト教保育を十分に学べなかったと感じる学生もおり、キリスト教保育について、さらに学びたいという意欲があったことが推察される。本学科において取得できる資格・免許や就職先の多様さを振り返った際、キリスト教の精神やキリスト教保育について4年間で誰もが同じ内容を同じだけの時間学べるカリキュラムではなく、基本的なキリスト教保育の理念や意義について教育しつつも、より必要性を感じる学生に対して段階的に内容・量・時間的なニーズを満たすような教育機会の提供が望まれる。

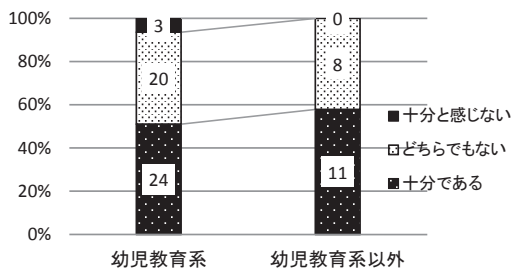


図2 就職先とキリスト教満足度

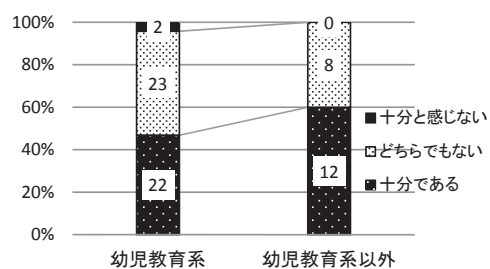


図3 就職先とキリスト教保育満足度

加えて、学生が4年間在籍した中で、「キリスト教やキリスト教保育の精神について学んだ機会」についてまとめたものが図4である。結果から、「キリスト教やキリスト教保育の精神について学んだ機会」はいずれもいわゆるチャペルの時間である「キリスト教の時間」が第1に、次いで「キリスト教に関する授業」が第1に挙げられている。「キリスト教の精神に触れることができた機会」と「キリスト教保育の精神に触れることができた機会」を比較すると、「キリスト教保育の精神に触れることができた機会」は「キリスト教の精神に触れることができた機会」に比べ、学科独自の授業や保育・教育に関する授業、または実習などで該当者の割合が増加する傾向がある。キリスト教保育に対する意見を書く自由記述欄には、「授業では受け身で聞くだけという感じだったので、ゲーンズ幼稚園^{注3)}で見学する際にキリスト教保育ならではのお祈りをしている様子も見学するなどした方が良かったと感じた」、「キリスト教保育を学ぶために、授業や実習でキリスト教保育をしている幼稚園や保育園に行き観察をする機会をもっと増やせば理解が深まると思った」などの要望も見られた。このことから、よりキリスト教保育について学びたいと感じている学生は、机上での学びにおいて知識を深めるだけでなく、保育・教育に関する授業や実習において、体験的にキリスト教保育について学びたいという欲求があることが明らかとなった。保育という行為について、ドナルド・ショー

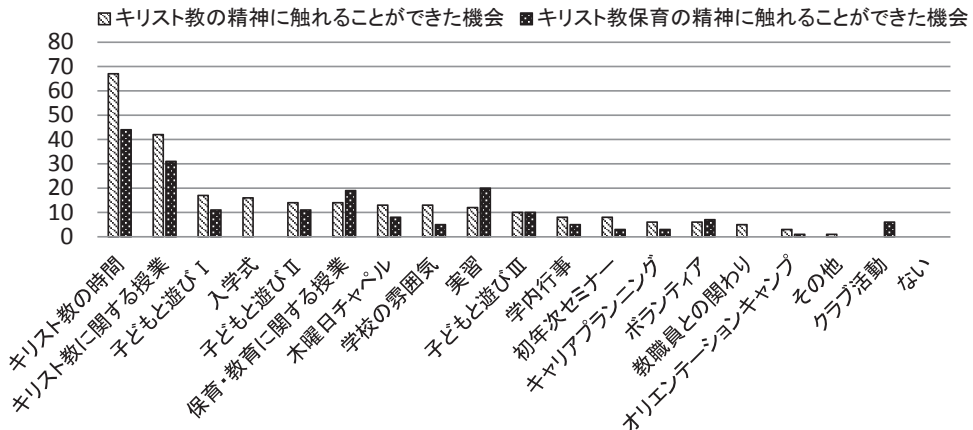


図4 キリスト教及びキリスト教保育に触れることができた機会 (人)

ン⁵⁾は「反省的实践家」と述べ、津守⁶⁾は、「実践しつつ考え、考えつつ保育する」と捉えているように、本学のキリスト教保育についてもまた、今後、知識・理解と実践的な学びとを相互に補完しながら教育ができる機会が求められている。

(3) キリスト教保育を実践する園への就職希望からみる「共感」と「課題」について

就職に対する希望条件が整っていると仮定したうえで、キリスト教保育を実践する保育所・幼稚園・認定こども園に就職するか否かという質問に対して、図5のような結果が得られた。冒頭でも述べたように、現在は多くのノンクリスチャンである保育士がキリスト教保育に共感しながら保育を実践していることを考えれば、仮定の条件づけに対して「就職したい」と回答した71.0% (n=49) の学生にとっては、たとえ実際には卒業後すぐにキリスト教保育を実践する園に就職しないとしても、今後の人生において、キリスト教保育を実践する園に就職する可能性も十分に考えられる。そこで、キリスト教保育での学びが保育者としての資質に与える影響について検討するために就職を希望すると答えた学生を抽出すると、図6からも分かるように、その内40.8% (n=20) の学生がキリスト教の学びを共感的にとらえており、逆に14.3% (n=7) の学生はキリスト教保育を共感的にとらえていないことが分かる。さらに、希望条件が整っていたとしても、キリスト教保育の実践現場に就職しないと回答した学生 (n=20, のべ23件) がその理由として挙げたものが図7で

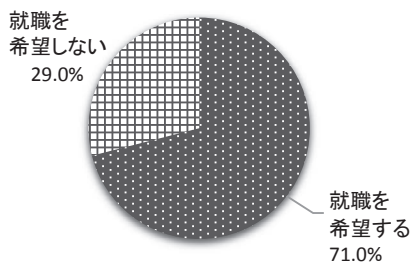


図5 キリスト教保育を行う実践現場から就職依頼があったと仮定した場合の就職希望

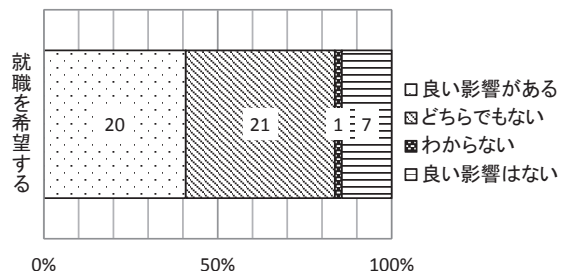


図6 キリスト教保育の学びが保育者としての資質に与える影響

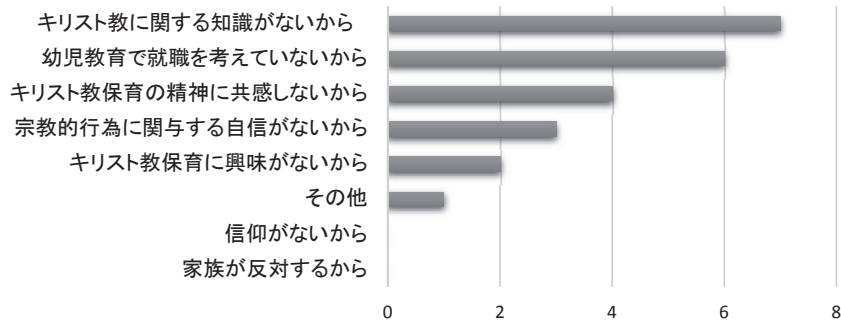


図7 キリスト教保育の実践現場へ就職を希望しない理由

ある。「就職しない」と答えた学生にとって、「キリスト教保育に関する知識不足」,「宗教的行為に関与する自信のなさ(讃美歌・礼拝等)」の項目については,大学での教育内容によっては克服できる可能性がある項目であり,改善の余地が示された。

(4) キリスト教保育への理解について

学生が本学科に4年間の在学する中で,どのようなことを感じ,学んだのかということの一端を明らかにするために,まず,キリスト教保育を実践する園とそれ以外の園について感じる差異について尋ねた(図8・9)。その結果,46.4%の学生がキリスト教保育を実践する園とそれ以外の園について「違いがあると感じる」と答えているが(図8),「違いがある」と答えた学生が具体的にどのような違いを感じたかについて分析を行うと(図9),キリスト教保育を実践する園はそれ以外の園と比べて,実際に保育の中で何を教育するかという「教育内容」や,形として表れにくい子どもや保育者の意識・無意識レベルの言動として表れる「園の雰囲気」が上位を占めている。

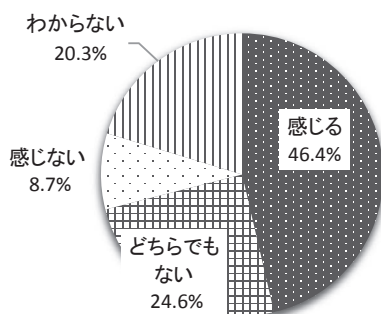


図8 キリスト教保育の実践現場とそれ以外の園との違い

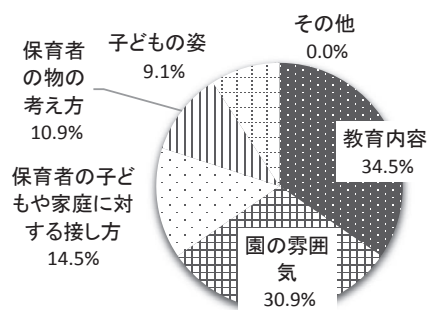


図9 キリスト教保育の実践現場とそれ以外の園の違いについて

またアンケートの自由記述欄には,「キリスト教保育は“あなたはあなたのままでよい”という一人ひとりを大切にする考えが強いと思います。幼少期にあなたのままでよいと肯定されることはとても大切だと私は思います。」「子どもを平等に愛する心に共感します。広島女学院大学の授業の中でキリスト教に対する知識を得ることができてよかったと思います。」「他者を大切にする“隣人愛”の精神は人生においてとても大切であると思う。それを子どもにも教えたい。」というような,

キリスト教保育の「一人ひとりを大切に考える方」や他者を大切に思う「隣人愛」に共感する記述が目立った。他にも「実習の際に、お昼ご飯を食べるとき、お祈りをしていたが、食べ物や人々に感謝できる機会が得られるので良いと思った」というような、祈願にとどまらない、感謝や他者のために祈るキリスト教の祈りに共感を覚えた学生も複数名存在した。これは『新キリスト教保育指針』¹⁾にも記されている事柄であり、ノンクリスチャンであってもキリスト教保育の考え方に対する理解が得られた部分である。しかしそのためには、保育者自身も愛され、受け入れられているという経験が必要であり、水田⁷⁾が述べるように、見えない将来への希望、すなわち保育者自身が未来に希望をもって保育に携わることも重要であろう。

このように図9の結果や自由記述を総合的に勘案すると、本学科の学生は、キリスト教保育とは、保育者が子どもや家庭に対してキリスト教の精神に基づいた隣人愛・受容的態度・個の尊重などを特徴とする保育実践と捉える傾向にあることが推察される。しかし神と保育者との交わりという観点からキリスト教保育を理解しようとする姿は、自由記述の中には見当たらず、また日常の学生の言動からもあまり感じられない。クリスチャンであるキリスト教保育の実践者であれば、自然な形で、保育者自身も神に愛され、受け入れられていると感じ、このことが未来に希望をもった保育につながるであろう。しかし、多くのノンクリスチャンの学生にとって、キリスト教保育が神と保育者との交わりによって成立するということは共感しにくい部分といえるのではないか。

4. まとめ

これまで、キリスト教主義の保育者養成校として、本学科におけるキリスト教保育に対する取り組みや学びを顧みる機会がなかったため、創立10周年を前に成果と課題を見出したいとの思いから、今回の意識調査アンケート実施へといたった。今回の意識調査を通して、4年間の「キリスト教主義に基づく教育」を通して、学生たちがいかにキリスト教保育について学び、あるいは理解し、何を身につけて今後の人生や働きに生かそうと考えているのかについて、一部ではあるが示すことができた。また、その結果から、今後本学科の学生がより良いキリスト教保育の学びを行うために教員が改善できることについて考察した。

まず1点目に、将来の職業選択、就職希望、取得する資格免許等によって、キリスト教保育の学びに対する意欲に差がある傾向があることから、基本的なキリスト教保育の理念や意義について教育しつつも、より必要性を感じる学生に対して段階的に内容・量・時間的なニーズを満たすような教育機会の提供が望まれた。また2点目に、よりキリスト教保育について学びたいと感じている学生は、保育・教育に関する授業や実習において、体験的にキリスト教保育について学びたいという欲求があることから、理論と実践を相互に補完しながら学ぶ教育内容へ改善する必要がある。3点目に、キリスト教保育を実践する園への就職について、「キリスト教保育に関する知識不足」や「宗教的行為に関与する自信のなさ（讃美歌・礼拝等）」が課題となる場合もあるため、キリスト教保育ならではの教育技術や、キリスト教保育の実践現場で働く保育者として知っておくべき事柄について学ぶ場を検討する余地が示された。4点目に、多くのノンクリスチャンにとって、キリスト教保育が神と保育者との交わりによって支えられていることに対する理解が得られにくいことが推察されるため、『新キリスト教保育指針』を十分に理解し実践できる保育者となるための教育方法の工夫が求められる。

しかしながら、「1, 2, 3年生の時にはキリスト教保育と言われてもピンと来なかったが, 4年生になり, いろいろな実習を終えて自分の進路もさだまった時にキリスト教保育を振り返ると, キリスト教の良さを感じることができた気がする。」といった意見のように, 信仰の有無にかかわらず, キリスト教保育やキリスト教の精神を学び, その学びを保育者・教育者として生かしていきたいという趣旨の記述は全体の7割以上に達し, 多くの学生がキリスト教保育から何かしらの教育に対する視座を得ていたことは4年間の教育の成果であるといえよう。今回は本学科のキリスト教保育に関する4年間の学びを検証し, 本学のキリスト教保育の充実をはかることを目的に考察を進めたが, 今後はより豊かなキリスト教保育の学びに向けて多角的な視点からさらなる研究を進めていきたい。

注

- 1) 保母養成科は, 1908年5月に保母師範科に改称している。
- 2) この調査は満13歳から29歳の男女1000人を対象に行われた調査である。
- 3) 広島女学院ゲーンズ幼稚園の略。

引用・参考文献

- 1) 社団法人キリスト教保育連盟：新キリスト教保育指針, pp. 23-24, 2014
- 2) 深谷潤：ノンクリスチャンによるキリスト教保育の課題―「キリスト教シンパ」と「キリスト教的空間」, 西南学院大学人間科学論集 7 (1), pp. 139-162, 2011
- 3) 広島女学院大学：<http://www.hju.ac.jp/guide/education.html#cep>, 2015年12月31日閲覧
- 4) 内閣府：平成25年度我が国と諸外国の若者の意識に関する調査報告書, 2014
- 5) ドナルド・ショーン：専門家の知恵―反省的実践家は行為しながら考える―, 佐藤学・秋田喜代美（訳）, ゆみる出版
- 6) 津守真：保育の一日とその周辺, フレーベル館, 1989
- 7) 水田和江・古川敬康：キリスト教保育の理念の形成, 西南学院大学紀要, 40, pp. 123-132, 2008